

中井清太夫について

原 淳二

- | |
|-------------------------------|
| 1 (はじめに) 近世・利根川治水史上での中井清太夫の位置 |
| 2 中井清太夫の履歴 |

1 近世・利根川治水史上での中井清太夫の位置

天明8. 11. 24 代官飯塚常之丞が江戸川、中井清太夫が利根川流域の定掛りとなる。
(寛政1. 6. 5 関東四川御普請定掛り 御免)

天明六年七月の利根川大洪水と翌年五月の江戸打ちこわしは、田沼政権の失脚、定信政権の成立にとっての画期をなす出来事。

天明六年八月 田沼意次が辞職 天明七年六月 松平定信が老中首座

「(天明八年) 此度中井と相掛り被仰付候へ共、是又頗る古兵ニ候へバ、拙者杯の様ナル不巧者ものハ一向に埒明申間敷、是又恐入候よし」(『よしの冊子』上 238～39)

※ 中井の利根川で行った普請と計画

赤堀川の改修と権現堂堤の修復
将監川蒔俵締切堤の撤去
中利根川狭窄分の拡幅
霞ヶ浦周辺の改修計画
鹿島灘放水路開削計画

中井此度奥州通船之事目論見、公儀へ御米并越中殿、弾正殿ほんだただかず(本多忠籌 泉藩) 御米も回米出来候と、自慢を致候所(中略) (『よしの冊子』上 191)

2 中井清太夫の履歴

— 中井清太夫に関する主な研究や著作

竹内誠編『徳川幕臣人名辞典』(東京堂出版 2010)

村上直編『徳川幕府全代官人名辞典』(東京堂出版 2015)

三田村鳶魚「御所役人に働きかける女スパイ」(『三田村鳶魚全集』第5巻)

※3

諸田玲子『楠の実が熟すまで』(角川書店 2009)

※3

澤田瞳子『若冲』(文藝春秋 2015)

※2

『よしの冊子』(『随筆百花苑』上下 第8, 9巻 中央公論社)

高野長英『救荒二物考』

『枚方市史』(旧版 1951)

西沢淳男『代官の日常生活』(講談社 2004)

高槻泰郎「中井清太夫という男」(神戸大学経済研究所ニューズレターNo. 119 2012.10)

高槻泰郎『近世米市場形成と展開』(名古屋大学出版会 2012)

※1

佐藤雄介『近世の朝廷政治と江戸幕府』(東京大学出版会 2016)

※3

窪田頌「平賀源内・芋大臣・楠葉」(『枚方市史年報』22 2020)

琵琶湖治水会編『琵琶湖治水沿革史』(1925)

※4

徳永真一郎『琵琶湖に命をかけて』(国際情報社 1982)

※4

石田弘子『藤本太郎兵衛三代』(淡海文庫64 サンライズ出版 2019)

※4

岐阜県立歴史資料館 武川久兵衛家文書 寛政元年7月「清太夫から国後騒動御尋」

ア) 中井家

中井清太夫 享保 17 (1732) ~ 寛政 7 (1785) 享年 64 歳
墓所 早稲田 宗参寺 (曹洞宗)

生国 河内国 父 中井喜兵衛器基 (基) 光次男 母 京都町奉行所与力木村条右衛門女

中井家は河内国楠葉村の郷士

従来、三田村鳶魚により清太夫の父は中井二左衛門、万太郎は兄と言われてきた。しかし、最近、窪田頌により二左衛門、万太郎との関係は、兄・甥の関係であったことが明らかにされた。両者ともに淀川の治水に尽力した人物である。

イ) 中井の評判

中井清太夫雑評 一躰山師にて、大和之百姓の次男、江戸へ参り御徒ニ相成候処、京都禁裡御勝手方役人ニ、清太夫伯父御座候由。右伯父ニ内々ニて京都役人私曲之筋杯承り表向へ申立、清太夫懸りニ相成、(中略) 其功ニ依て御代官ニ相成、甲州へ参居候由。尤河合越前ニ氣ニ入、其後松本と縁を結、赤井へも至極心安キよし。(『よしの冊子』上 59)

ウ) 履歴や活動 表 1、2 を参照

※ 解職理由

中井らの解任理由

※ 処分理由

寛政 3. 3. 23 「中井清太夫慎中ニ付」 (山来家文書 4 4 寛政 2 「御用廻条留帳」)
3. 4. 6 「中井清太夫慎中ニ付」

寛政 3. 8. 13

「甲州在勤中之儀ニ付、御尋之筋有之」 ● 「寛政三年八月十三日 評定所へ罷出候処」

- ・ 甲州代官時代、払米を請け負っていた久米右衛門より前勘定奉行赤井豊前守忠晶へ金子を用立てたことを承知していたこと。
- ・ 青山喜内が申し立てた甲州の新田開発に同意し、村々の難儀を顧みずに開発させたこと (目安箱に訴え出た者がいた)。
- ・ 追放者である井部定左衛門を手代として召し抱えたこと。

飛州にて不宜御暇出候地役人を中井清太夫内々ニて抱、役所へ日々出勤為致候由、中井趣意ハ、右之者共ニ飛州の事色々承り、申たて巧ニいたし可申の由。

(『よしの冊子』上 191)

其子勘定吉十郎某父の咎により。新に五十俵下され拝謁以下命ぜられ。小普請に入御前をとどめらる。其他連及のもの多し。(『統徳川実記』第一篇一六〇頁)